



俳  
代々香句  
 句  
卷三

壬  
 天  
 保  
 十  
 三  
 年  
 冬

寅

初

森  
 井  
 口  
 丑  
 村  
 主



題額

空梅

高灯籠落却記六つあり  
 薦も何とぬ橋一初月  
 六人の桶よお入れば兼  
 通りかたむし餌さ下  
 善い瓦緋色もより水  
 車の果は三つ子に水



足ももは抵灯もも花舞  
 尺ももは傾峰の年  
 かこつて師の如山松  
 水門よと向り折所  
 魚もも一肘、鰐のうさ  
 毛もも毛もも心花  
 木力の舟是是のと若の聲  
 月の名埋じ夢のち  
 鶴馬所裏、都々々音  
 角力とり〜や、お出く  
 水 水 水 水 水 水 水 水

三二

花 燐 見 かぶく

蘇の燐の禍とるは心むの禍  
 輪花の旅森 棟燭何ひ  
 蜂の巢も深か減とあひん  
 ちやな顔い 溪の赤坂  
 切出、石のありの地を  
 柏、鰐の川ち〜寸 胸  
 小舟、満る、扇 芝の西  
 研子、こ〜ま 伴者保女郎  
 わさこもも〜、法蓮の堂、  
 字、海、若、低、き、新、橋、  
 水 水 水 水 水 水 水 水

やまがこ

鷺

換  
丁

世吹雪結細のほほけ  
 けり 咄し 種 礎 下  
 秋のぬきん今も 既と  
 豆 揚りく、 桑 葺の 菊  
 法 世 へ 乃 の 乃 へ 再 的  
 去、 四 角 なる 版 の 玉 くれ  
 何の年く早 向ふと 汽 撞 木  
 舟子のせきり 岩 移る 人  
 屋 賃と せきり 岩 移る 人  
 享 保 曆 へ へ へ へ へ へ へ

三

生 勢 魂 和 泉 へ ゆ へ 乞 門 流  
 末 的 の 鱧 相 喫 へ 来  
 智 菜 地 持 也 橋 子 月 確 へ  
 手 洗 へ 音 へ 書 人 の 菊  
 歴 の 子 子 出 け へ 犬 具 負  
 夕 ね へ 録 へ とう 峰  
 竹 止

三



荀の宮物もさしあこ下  
 連摩子満るしとけり 彌湯 午也  
 吉原の勢もさう蘭島の月 勢河  
 さう目とさうの裾もけ萩 伊佐  
 精輪も連下川の 因西 午也  
 法場も信ス 文王の暇 法河  
 先づの朝の事ハ流矢ハ 伊佐  
 繁昌ささく 血の流るる 舟也  
 舟もさ大なる旅路の屯 於葉  
 ともささく 金銀葉の 勢河

吟詠

蓬たあけと井の山さうり 伊佐  
 鴻もさうけり 春の亮 男車  
 七雲の干さのし門や開ぬん 一海  
 いさささうさ ぬ里あちくさ 芝園  
 文月の舟さうさの二日月 加山  
 こちも舞さうさうさ 梅亭

岸邊子 鏡 三 中 日 國 法 燈 光  
 和 比 丘 庄 の 名 寺 寺 門 前 水 光  
 夏 夕 暮 夕 陽 影 船 の 影 豆 毛  
 初 鷺 鳴 酒 白 海 鴉 山  
 助 方 力 の 一 曲 牛 牛 牛 聲 國  
 解 の 了 了 了 冬 の 鹿 子 煙  
 知 々 々 鹿 跡 一 出 行 け け け 好 車  
 毎 日 是 熟 之 高 萬 年 地  
 福 海 の 善 心 心 心 信 子 の 上 字  
 之 の 道 誠 福 福 福 萱 子 の 松 徒

隅 田 の 月 光 光 光 中 日 國  
 隣 の 向 へ あ い ち ち ち 花  
 小 衣 と 佛 壇 の 子 子 大 南 山  
 砵 存 一 一 一 女 物 軍 車  
 押 出 一 一 一 一 一 一 一 水  
 名 産 一 一 一 一 一 一 一 字  
 寺 一 一 一 一 一 一 一 花  
 甲 斗 一 一 一 一 一 一 一 燈  
 病 人 と 叫 一 一 一 一 一 一 一 車  
 海 一 一 一 一 一 一 一 水

こも傍のうらなう後ら室の中  
 山  
 喫くこころに三角子味噌  
 佐  
 抛るもつまらさ月の中下鹽  
 於  
 関節元く惜いやけたり  
 漁  
 百豫け戸帳とよく極み  
 字  
 荷くく擔 湯の熱老  
 花  
 宵くくと念子粒正控袋  
 園  
 力り通くは次の枕灯  
 燈  
 琴の吉の亦女語町町色  
 水  
 對し上戸と笑も一對  
 車

六 磯

牽猪の師走、ききわ草一柄  
 岩池  
 海くものよけはしるしと也船  
 里地  
 炭薪水へ流る川山夕  
 山夕  
 鼻の表へ変る 横窓 遊若  
 大概子月ん献立工歩海 如極  
 芝蔴中らるおま由因 身官 巨魚



秋の田と白い子と新音と  
 けちと氣とり藤おいかぶ  
 とと袖の丸くあつと籠り  
 渡ゆく移し言ひ琴丸  
 小舟の心らしきと掃ちきり  
 名貴いし中法法為格  
 薄雲の肩の袖も物休  
 しと友の顔さしあめと物  
 名月と袋とるうさ昔夕  
 土美をく花もり吹  
 梔

+

三味線子別て合ぬん  
 去のの習あるとせれ  
 襟もとと洗いまはと猪子  
 枝り守樹の下り掘り  
 鯨家浦の地女命眉く  
 ひとと花披表具しと見  
 一山の力まうり澄子  
 賈島と院子敲竹先  
 投とく茶粒干のち角  
 有地もしこまら明中ん  
 梔 梔 梔 梔 梔 梔 梔 梔 梔 梔 梔 梔 梔 梔 梔 梔

鴨 余へあつきの鱈の鱈屋 巨  
 尺 ころはかられ 船子 海 笠  
 大工 ころし 柔もかき あり 海 笠  
 う かせ ころし 舟 ころし 笑 せ  
 猪の糞子 切 切 行 柄 師  
 津 魚 入 入 透 と ころし せん 雲 崖  
 深 草 の 出 と 船 ころし ころし 西  
 首 一 中 ころし ころし 勘 南  
 よい 女 ころし ころし ころし ころし  
 是も ころし ころし ころし ころし  
 活 活 活 活 活 活 活 活 活 活

木 目

一 条 や 九 際 の 九 福 初 時 局 只 徒  
 牛 ころし 河 ね ころし 遠 炭 松 峯  
 乃 ぬ ら 方 狗 新 も ころし ころし  
 終 子 居 宅 ころし ころし ころし ころし  
 月 ころし の 看 板 落 ころし 西 へ 入 秀 崎  
 羊 菓 ころし 助 ころし 松 ころし 吹 打 吉 倉

けしどろ標名の後、野の登 兼室  
 粥子 黄頼 魚らうと刺し方 乳子  
 梯一の素子 油摩、一、宿城 峯  
 去の一時の痛くうじ 佐  
 親吉の地と信了不行 絶 东  
 物まこと 瓶へ、傷く小 壺 壺  
 海埋む雪のく 海世 土 壺  
 見との象 治と名をぬかす 壺  
 歩の車と牛 自力 壺  
 花押のけり 壺 壺 东

+

掃一房とちと 徳と日月の 峯  
 末白里の戸 田子 壺 壺  
 向枝折のぬと 壺 壺  
 連く、ちのと 壺 壺  
 巨層金の部と 壺 壺  
 地 壺 壺  
 積子 壺 壺  
 新田 壺 壺  
 南風 壺 壺  
 松の研と 壺 壺

人歌とんも夜目の秋酒の雨  
 一貼 砂下 子うち 一きり  
 昔の板と鹽へ浸る日と年 室  
 子の指現も海ゆりこを 東  
 干と門の橋杭細く縁は瓦 峯  
 けけ出た時のより一きり骨 佐  
 橋橋のあやうららのまはれ 壱  
 内市く田と付のまわつこ 室  
 耳くも杜とよきあのみ盛 雨  
 付はきく柳 先風 秀

新 京 清

我もその腕の所よりと 相解 官位  
 志く清みの系はみそ付 水光  
 明の又唐子とねはねは 佳作  
 強ははらうも出刺さう 新築  
 持家く道ませよと月い 豆毛  
 繁ととり 瓶おとす 清水

志行く秋と秋色平中  
自りと地一丸大丸  
懐く子三季引久醴や  
女只那子何ら 龍年  
とくくると厚一深して舟の若  
床の社の 隆子 建  
岩子つと抱きささる如那之依  
意照池はな逢ぬあ七  
古傳掌三人流ひんらるる  
いし先くの構く子時倦  
水

月の雲物亦も入はむのそ  
結くれ二玉其面てり  
親も人疼るも秋下り  
酒ははうへ丸五十一日  
筆の懐きも消えく緋筆  
縮下下起しと一まき母子  
是みもや一つも若く後教  
役のり名もさけぬ新了屋  
常の筆の叫てはかくまを  
片の命やんふあい如  
光 光 光 光 光 光 光 光 光 光

美流は昔も鑑に豆の月  
 是のくのぬれあつたる  
 初雲かゝりて上野を  
 葉のもししき春の西遊  
 今この物入の待たせぬ  
 俗の家猪の似てはつて  
 石白と信子がいかにか  
 及了れはれはるる吾川  
 お櫃、裸くぬるるの毛  
 摘や皂角 ちりももも

和心

船の沖とてを知し春のり  
 出雲の舟もはむじく  
 燕の飯抄子亦に影ありて  
 春の東乃草く平に  
 芝萱月とては腕より  
 多門之つ 油分々ち

出雲 舟 燕 春 芝萱 多門 油分 ち

何れ様子のあはれさな高れ  
 丸男 ひとつらぬ 神 推  
 首尾連く返れいと死ぬか  
 絲波 して踏く 絲 冠 推  
 かたわらしく腕もどんを押し  
 為甲 せしわらか 音多し  
 去る せり ぬり 極まりけ  
 うきと母 跡を踏後そめ  
 若新 一、黄正 梢より入道  
 り先、玉り先と 月 冠 推  
 関

何れ様子のあはれさな高れ  
 丸男 ひとつらぬ 神 推  
 首尾連く返れいと死ぬか  
 絲波 して踏く 絲 冠 推  
 かたわらしく腕もどんを押し  
 為甲 せしわらか 音多し  
 去る せり ぬり 極まりけ  
 うきと母 跡を踏後そめ  
 若新 一、黄正 梢より入道  
 り先、玉り先と 月 冠 推  
 関

今海路、元々も堪忍しきも  
 歌川、さし、寺の材木  
 月の夜、色く一人、能く朱  
 多、後、痛、あき、い、城、さ  
 別、道、園、ま、つ、わ、れ、酔、つ、出、る  
 板、へ、さ、し、平、一、面、に、降、り、も  
 柄、袋、つ、く、代、色、あ、ん、の、序、目  
 嚏、さ、ん、よ、湯、立、お、休  
 足、し、り、い、る、早、と、い、ぬ、を、甚  
 福、く、う、し、勝、の、為、に、編、造、閣

停騎

降、を、ま、り、わ、れ、る、落、塔、の、世、不、董  
 橋、の、波、に、活、み、の、う、人  
 雉、子、の、し、お、親、の、意、意、の、あ、ま、り、心  
 乞、い、指、葉、け、あ、り、る、う、ん  
 如、母、子、の、琴、師、の、暖、簾、新、の、月  
 と、ら、人、ち、や、り、桶、の、花、の、燈  
 兜、守



約指と曰く新なる葡萄柳  
 舟まり女着佩りし  
 意のしほもその名にふら  
 海とくくくまらる筆持  
 新為の生くはりの加減  
 弁ころ木綿 稚 友達  
 子川や田沼川の月桂の  
 己の晴と志のし羊の葉  
 抱くわ祝の道乃者よ句  
 比丘居ぞりく 命衣に  
 水 箱 宝 水 箱 宝 水

揃い山陰のし 華乃み  
 好まると一日漬ス 華乃み  
 鶴う出くしと志のし結と老  
 海子寺外科もくつ  
 尺のの物古も三月火の舟  
 園へぼりしりげらくの舟  
 かこのも鶴とまふも  
 大貴己の 老 亦  
 旅の船にさる欲と子 橋  
 柳、本より枝のし 持  
 箱 宝 水 箱 宝 水

合の夢二日の母とちん院  
 初志のまじりて方に骨隈  
 猶ほとく國の内、縁つきり  
 傀儡の枕敷とゆらけ  
 わけもがら痛と力と任せ  
 琵琶も功なき目、庭こ  
 中碎よりさるる、算あり  
 糸のり、一息よ、刻派  
 あり、臨河とそ、むつ國  
 ありとても、接とく、けく  
 室 船 水 弦 室 船 水 室

舟中記

一つの舟、舟の男、花大根  
 舟中より先、舟の舟  
 晴き、舟の研法、の難  
 船柄、休む、舟の舟  
 油豆、舟の舟、舟の舟  
 船子、力と舟、舟の舟  
 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

西京に在りて深き川と織  
 母の登りて皆善哉ん  
 得るに風へいり昔の花  
 惜うりたりてくきり止  
 肩よりき垣架解り着し  
 唯夷兒をよまり果は板  
 玉のゆりてき定へきは  
 平目の後へこきり月  
 産るにけり出拂ふ土の  
 筆がさりとけりふとけり

所代の舟に洗ぬるの  
 簾の安くとありて  
 神ありて舟のちり  
 かりにきりてきり  
 濁てくきりてきり  
 他村の菊へはさき  
 並居りて負ぬ不動と  
 やりて胡居織とい  
 黒髪より房ありて  
 八百屋の帯り子由

+



病身とふたすは身おしき下  
生けく初の出麻ふも二里他  
傍の歌也のちもこけらわを  
たふしつふつふか研也  
大山の目い望んこも巻の目  
光及りい懐珠り那泉  
茶海の魚も涌りの福永光  
垢離くこじ里のむ火見持子  
城持の新白蹴え今あ月  
清く影く衣うつ下知下

髪い文おそい足袋の首共  
昔妻と何勝よの人ぐり換  
雷の悔い、蕨殊中りり  
春の情い、唇の昔音也  
熟乃轟くくを所所纏ひ  
舟日續くく鞠子い可  
相礼の造次顛沛福の入  
以り福病ふくもと分  
既中より吾礼い別深 昔居  
不道志居れとも酒瓶へ首  
於

氷槌の舟、舎は是非の他  
 廣平目と名初孫の善守  
 互海を種家島の地と  
 嘆をとりて、乳母、仰山  
 下 葉へ降きと、時をきと、  
 里 六へく、並、人、秋、水、  
 襪、他 四、土、町、を、濁、  
 入、平、の、屋、浦、網、  
 乾 葉、螺、へ、と、い、う、  
 毎、了、の、葉、  
 他 母、衣、袴、を、  
 括、ぬ、巻、  
 人、葉、  
 下 臨、掃、ぬ、を、  
 岡、雁、の、  
 泉

金吾泊子  
 義助と思ふ出

水と煙、樵、刀、丸、杖、の、お、  
 袋、  
 手の、も、り、り、葉、の、む、  
 月、  
 久、  
 翁、  
 唐、人、子、お、葉、の、  
 地、  
 入、の、息、  
 雁、山、  
 水、  
 完、  
 う、り、ら、の、  
 怖、ぬ、  
 新、  
 水、  
 庭、  
 子、  
 他、  
 子、  
 他、  
 子、  
 他、

花雨の蒼くはるる珠あわい  
 一 順 雨のこぼるる刀  
 種余いらくとまらるる里津屋  
 こちりもほすあなす  
 切 珠粉とゆるとみよ葉あ  
 名子毒のくふ首尾なる鯛  
 饅頭の中と出た佃田所  
 象のあし 象もともかく  
 志光、帆とこの手く奥家丸  
 水はと水もあつ人の養光

新垣も藤下りの月さあ  
 鏡の鏡 玉もさう  
 松島ととそよる目のみち  
 まげけさ、物平何さ  
 山伏のふいねと海へ  
 武蔵の井柳 時ちま  
 下急しもの軸起し一ね帯  
 代 智し 人形屋 浩  
 切く投 割く志さる見と料理  
 能何は お何は珠光紹路  
 山 水 光 新

高陣と扱はるる子孫衣  
 富士川荒し足踏し馬  
 物枝うらまひし毎のまふ月  
 見れし口を方種をりし秋  
 新巻の豆腐は小落酒の過  
 家来抱ひ子孫存し此世  
 たしとくも七福神も菜の如  
 妹少り扱と扱さるる先  
 一をさるるもの川子園とく  
 町さく待ひ扱とく〇てり  
 水 光 山 約 山 水 光 佐

排字

湯舟呼けや鳥のさしは  
 萩しけららのあまのまひ  
 岡の梅胡麻の恵もと揮はん  
 月の匂は九月しかり  
 舌(抄子)夜へ吸盡中他を  
 腕ちりりしてあ升の皮  
 雲佐 逸老 水 人 水 志 水



善の故中ん馬家子戒被り  
 せと何呂嬭し出とと、鴨  
 汐時、ようんと信より可  
 きつきて弾中のがんき  
 高お、掃きつとく種の下  
 石と靴より了こせぬ 核  
 袖へーの番業人秋の段より  
 伏えへ助る月の相きみ  
 物婦、やの板俵めんとして  
 柱、ねくとりり、池面の舟  
 舟人 舟人 舟人 舟人 舟人 舟人 舟人 舟人 舟人 舟人

手世三

雪隠、むしる杭と出流きよ  
 田ととうり時、津直しやさい  
 燕、いゝれ、足跡く小ち力くし  
 蕎麦子おま、く、黒髪子象  
 さ、みく、の、阿武へ、葉か、  
 幟、めり、子、崑崙人、も、か、  
 毛、く、せ、く、縮、の、四、音、か、  
 同、よ、い、き、く、ぬ、白、ち、ま、  
 大、枝、へ、も、せ、う、け、く、本、挽、も、  
 ぶ、い、さ、い、と、團、門、の、ま、  
 舟人 舟人 舟人 舟人 舟人 舟人 舟人 舟人 舟人 舟人

家の月小年の星子手み新 冥徒  
 角力日記、松浦淳と 水  
 素一のんよ美危好とな栗柱 嘉人  
 呼、中子光、甲 曹 匠  
 手よとれ為よ志のあき難く 水  
 云、~~~~~ 志のあき 落人  
 面持 孫と手まはる 脈とあ 志  
 一 天 深く 垢離、かたぬ 水  
 じらひるやふ事のがく二分三分 冥徒  
 志の 中子 仁と 志、 志  
 志、 志、 志

三廿日

初巻

初年や柄よ為の取合也 冥徒  
 旅の配の種草一に本 初子  
 心も始河原も作保の光もく 三井  
 瓢箪取とけらいてものごと 冥徒  
 三日舟のよとて一 鞠陰 初子  
 暗く縁尻のひあつと懸 三井



平養とわねりし女中も  
由麻とともなふ落月  
黄縷、鼓志の事さきよ  
袂く呼ぶもつゝ一蛇果  
着ち守蓮の格ふ子、激く  
借用し—武士の耳掩  
薄紙のちも巻の方の  
あ、晩、狸と過じ下  
斬新もくふ、抱きし  
弥生のさきし、世帯  
酒  
三升  
加一  
皆作  
油子  
三升  
油子  
三升  
油子

手共

霜国

霜風や濠と厚じ輪の  
帯も移らまは、弱の  
三日月、新中、夜  
お、ゆ、り、穴の、味、ゆ、り、橋  
人もゆ、新、ま、り、新、車  
夕、新、川、の、と、新、い、城、坂、

寺町へ曲が名漢屋のそと  
 上下とてゆれりも ニラキ 白禿  
 踏むは子ちかへ脚ななぬん  
 十日絶めくきあきと系  
 高き子俵い床とてゆり  
 靴のとゆめむの 妹  
 的ぬくともあきと急なは  
 人取町子 晴さあ月を  
 何とてい波いまき心は海  
 舟はふい時 踏むは海と  
 舟 山 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

月あやぐ代にまづの船  
 冷とていり音車井の言  
 折ともおまよふ船いぬれと  
 討果さきりり田地買うぬ  
 奥い所をわと女房の十二町  
 舟もいりや白粉や舟  
 祇奈川の礎をり少舟寺  
 夜は踏くい去とての荒  
 菊薔に疎束とていさるれ  
 板切杭 大根 畠 舟  
 舟 舟 舟 舟 舟 舟 舟

かひく筆や去日市大坂 加一  
旭、持りり 坂のとらり守 加一  
六月、然るまゝ、明下、新、新、月、一、心  
出入、中、小、梳、屋、事、は、短、母、育、心  
を、さ、じ、お、と、志、て、舟、し、襪、の、百、加一  
強、く、為、り、の、も、お、ち、あ、加一  
南、い、む、つ、精、い、丸、い、ま、さ、も、り、加一  
明、り、赤、目、の、か、ち、さ、う、や、さ、加一  
重、報、と、村、の、も、の、人、の、押、育、心  
舟、の、質、と、ゆ、な、ら、し、の、明、加一

なまな

青、い、海、面、の、性、觸、り、く、く、加一  
さ、わ、ら、た、の、の、け、く、細、川、加一  
望、く、い、ま、ん、い、替、替、の、お、浦、之、加一  
難、買、袋、さ、と、は、せ、り、加一  
名、月、や、武、家、の、さ、ら、ん、か、徳、海、加一  
折、の、ら、矢、い、の、の、拵、加一  
巴、加一

深の木底乃の統、秋も色  
 行るあゝ先橋知つゝ新  
 小坊至の耳くかき年暮如  
 杜秤信く来て地獄目のあ  
 鞆はは信くもかゝ面、か人  
 似屋きささる女もな方い  
 志つらるときぬ急重の美い止  
 悔しやなよん建、橋幅  
 湯たゝ獨鉦と成く角力丸  
 八十六久保 大久保の月  
 佐巴若佐巴若佐巴若佐巴若

三九

世中も憚りまゝの玉帯  
 物枝の系腕思ふ新路  
 魚く踏るはく兵規とあ  
 袴ハ一筋ニケ玉ハ一浴  
 新靴は信くあゝと心ん  
 ころよ、いさ統物もふくを  
 阿曾、津田のあゝと拈らふ  
 男子路踏切、何と由借  
 男くは也くゝ淋が道換  
 舞もは何土宵も毛氈  
 若佐巴若佐巴若佐巴若

必もくしき中よ 十五日 巴  
 百病焼立月とまの  
 ゆりさぬい園のこまの夕躍 巴  
 弦子小舞の落坐し草 巴  
 長くと麻糸迦のまの三人 巴  
 身舟も手物木管の真山 巴  
 理ふ巻手袂と舞人 花盛 巴  
 し子のあはま流子 鶴酒 巴  
 荷下子十箇うけてまの色 巴  
 矢らんへともをしこの 扇 巴

二十

巻尾

初年や伊勢元くは七を 巴  
 梅いづれと子 鶯 水丸  
 片个董向子額子能りて 倚定  
 朱鞘くさるぬ 嘶しかり 馬色  
 何事とり子 指結のき舟新 昌匠  
 清も新もよきことか 宗院



逢坂の持とつら入新由也  
 油、ひく、子代の手寄  
 本狭の古と、な、の、え  
 鳴か、き、は、禱、け、い  
 女、あり、お、あ、え、人、枝  
 天、物、と、は、可、笑、お、う  
 を、孝、も、福、お、え、心、お、え  
 芽、も、眼、名、接、骨、本、の、痛  
 籠、月、的、場、の、身、持、一、ま  
 結、方、の、う、し、ら、何、も、の、尻、七  
 融、初、融

手三

男、も、心、中、あ、い、ろ、こ、口、子、校  
 切、く、結、く、籠、く、又、慈、悲  
 焙、燥、と、何、の、あ、ら、け、一、の、む  
 格、道、を、か、つ、あ、ら、け、く、に  
 と、れ、な、め、り、な、修、な、神、も、権、師、可  
 四、十、ハ、あ、ら、け、け、を、あ、ら、け、く  
 ば、子、の、根、を、よ、い、あ、ら、け、く、力  
 こ、つ、ら、の、や、が、く、こ、つ、さ、守、格  
 白、く、あ、ら、け、く、毎、日、川、の、中、と、さ、記  
 六、百、巻、ハ、く、り、仕、旦、ハ、月  
 融、初、融

本座よりくぬぎとよき道なり  
 飛節の膳より向し燭燭  
 次けくききは海士の虫つじ  
 赤色へ赤と如き世のれ  
 赤花燈と見えくくくハ九条  
 赤の強くし元の面さく  
 股より袴より赤の配り  
 赤つと赤とよき力揃も  
 三の付向し赤物と赤の門  
 福祿寿くは角角ぬ麻  
 以上  
 水紀  
 紫院  
 昌和  
 忌已  
 只佳  
 細能  
 以上  
 水丸  
 信定

美画

大相より伊豆の白鷺十三  
 馬の心の手勢拍出する  
 馬の心の手勢拍出する  
 群一ととおはえんき智は  
 番附と魚買家向し名  
 鉄くくくくくくく  
 以上  
 一草  
 超巴

佛子 未名にありて遊刹、  
 人も指も 蝶々も 勢  
 富士峰より南遊く所と振舞  
 粥、嬉しい。是 油 煮  
 もとのふりゆきと止し 刀縁  
 名尻に流きさのよそろろ  
 患先 雪子 車の川ぬゆ  
 痛いとろろ入るは 老老  
 碓の強のいつてもか子後つき  
 味をこしこしと巻やわらん  
 巴

寺の月露と納汗の芽膏と足  
 夜も隣に 南を三方 香  
 袖へ手と雪を入るる壺の口  
 生員 離れをり合く 清々  
 心焼もあつ 教うの 乞食  
 梵天のくく 酒の 鶉  
 立ちやが目よの舟と松  
 喧嘩と中一 闇あやかし  
 雷の三目とく 床涼  
 杜氏一 信子百日の桶  
 巴

云流ら初もろくし紀藩の先  
 情物人二人 先といは  
 一箇子 弘禱と信と意の月  
 子 漬人 柳 子 爲  
 うつけあふたの腕とらん福  
 子 蛇と舞くしりて 酒子  
 此字に建てるものなく  
 本 夕や 一ふ 醒井の杵  
 子 探と買く 信く 必 是  
 子 流生筆 玉 くの 祝  
 子

枕鳴りや田舎のよしの生れ  
 子 子と 子と 子と 袖よとせ 具  
 子 子と 子と 十里の旅と起 扇  
 子 番 振 鳴 子 子と 汗 如  
 子 夕月や 西の 赤色の 花乃 具  
 子 角力に 始り 足や ね 清 牛  
 子 禱

狹小の中へ新に茶師の火  
 席は 伯茂の 垣溪 せん 株 道安  
 寐ぬちも茶も寝し 雲より 枕子  
 心中へはと子 解の 人立 吉和  
 小田原へ 姉と 姉に 先へ 紫川  
 龍元へ け 心へ あり 雲  
 福海の 豆は 所 粒へ 雲 衣 梨  
 由甲 贊 町へ 至 扇 黄 旗 他  
 是れと 手と 手と 負へ 志の 枝 磷  
 籠の 丹 乃 馬 士 子 隆 系 風

廣中子 出く 言ハ 三方 鹿 馬  
 旬才 茶ハ 湯ハ 産日 あり 湯 川  
 系路 へ 土 産の お子 買へ 一 茶  
 佛子 あり ぬ 合 念 一 し 地 梨  
 切針 と 孫へ あり 向 け 備 ぬ 屋  
 着て も 見やう 掛い とも ぬ 一 礫  
 小使の 万ハ 柳へ ち 笛と 吹 杉  
 十 二 日 ぬ と 挽く 浴 ちり 川  
 と 子 男 薪と 割り ち 肩と ぬ け 湯  
 後 志 所 非 人 先の 心 分 梨

陸奥海の岸城と約難賣好  
 地瓦一形も依葛孔明  
 大河や筆と唱む夜の月  
 松もも強<sup>ん</sup>市の標蒲一  
 浮きよらんけけ一尺底  
 南浦ふきけく<sup>ん</sup> 吾原  
 子たうの程いけい友千鳥  
 持信米の管子の流と  
 ちやさく造り家の小紋形  
 一筆 助子 土子 蒲 英 棠

竹情

鷓鴣鳴聲け筆鞋如傳更  
 地子ゆきかう<sup>ん</sup> 枯の窓  
 徳利さう本形月の松  
 床い昔もあ<sup>ん</sup> 手拭  
 糸原の音<sup>ん</sup> 有ぬハ聲斗  
 先様思<sup>ん</sup> 玉<sup>ん</sup> 玉之

〇  
 梅庵もあつてさうして本柱の  
 ね減のうへへさうな女はあつた  
 奥杯もあつたとさういふ波の  
 巫女の歌もさういふ波の  
 油も倦れ赤坂泊部の上  
 又うらやまの紐もさういふ車  
 買もさういふ糸屋の暗い洞と出  
 子と川のけり大の力振  
 空の雲助けくくさの館の傘車  
 四角の海——飛井戸の毛糸

十  
 幸清さんさういふさういふ月  
 田螺の産物もさういふ海  
 船のつらさういふ海  
 既中の耳もさういふ海  
 岡澤の茨根殻もさういふ  
 いんちもさういふ袖の  
 うらやまの人もさういふ  
 五柳先生 舊 在り山車  
 更なるもさういふ大工  
 さういふもさういふ海

魏篆と篆答と入く佛とな  
 命ハ粉茶 氣目美 他  
 物せその物屋ハ初が所の月  
 去草初の 名しつらん 車  
 之何鯛の下子 沸き 燃き  
 比敵と 孫ふ 汗巻の首 長  
 是飛り 落さ かくく 中 傍  
 縋のうらへ 及も かし 之  
 弱い 暮子 伽の ちん ぬ ちの 者 虹  
 しの 暮も 只よ 揃ぬ 麟之 趾 三升

源

茶のちや 秋あちり 一の 要元 空  
 こゝの 音や 信ぬ 兒 友  
 和の 戸ハ 獲序子 敵はく 法海  
 小作 初く 信ま ち 右 寄推  
 飲き け 翁の け 初翁の 月 角止  
 三く け 出立 極 作 推 暮 老



初月とらや田るも群りけ 越巴  
 妹唱山の陽紀三井と撞 他  
 中巻の強もまめ茶一はくを 推  
 局の養と祈るる 止  
 とくめせく取て、影と吹とれ 以  
 佛事奈礼 吉 京カ恩 海  
 四毎の強の具後には子茄子 巴  
 口の人寄く尖能何りうと 止  
 八列、土屋を築へ 或百片 推  
 馬士の唯唯、蜂まきりて 止

音るもの始大神朝の月 他  
 又お櫃へ床ふ 市 以  
 夜を信うて隠居 突前 海  
 弓にうりとも色 慈り 續せぬ 若  
 物屋出ると来ると耳と上 巴  
 糸為算本解 生盤と吸へ 推  
 云 時、母、考へる子方と任せ 止  
 楠、垂ぶるか 遊 剥の旬 海  
 一 海舟のく出るもくも園き 以  
 泣被ては 泣く 小便 他

月邊一白雲の上を角樽  
 木のふらびり響の湯香  
 平判の華と志光の目打所  
 草一た信たつ、強抱け  
 蕪殊うは抱心しる子種供  
 髪うけ下懸鶴の系所  
 比舞うもろこまらん子と  
 芝よ神明加茂出所かく  
 長束とらむり泳とくまの山  
 河かたの心とくし中旬  
 枕香

迎乗

中ぶさく 襟衣袴の巻  
 籠 籠の中と海一筋形  
 春の花情素の蓋はあ  
 ち一匹の肌、人子羽二重  
 小里出とくや葉十たひ  
 磁とくくくあ海月情  
 只  
 字石  
 尾六  
 起巴  
 字名  
 尾名

華表しつる古奥の空を  
 渡り、皆中一の儀ありたり  
 お振てるもの志す四十首  
 もも穂石の無記の類は  
 此らの子安松琴の如くや  
 大熱一本一ひしり  
 筆壇、河の系下もふかしえ  
 こつ子の力、鶴の毛、ぬい  
 又日こよ吹糸の塚ありき  
 他好のこころ、館のおそ  
 超色 只他 超色 只他 超色 只他 超色 只他

乗房もろかえ、空花の皮  
 削りしつる、枸杞垣  
 由茶一門、昔呼ぶる世なり、  
 妙義のろよ、想する所は、  
 自墜後、なほも、渦、平、  
 関、の、舟、  
 味、の、ち、  
 小好、の、  
 白、の、  
 家、の、  
 超色 只他 超色 只他 超色 只他 超色 只他

早柳と寄ねしの母と習  
 尺と男とくまねのう  
 花とあしと白と外と  
 百あゝと拵と子と  
 強方冬川乾草の先  
 けりともけりとも  
 枇杷青の店室十  
 何の山と女もハ  
 可口の埃とと  
 波名子と喜の

穴  
 為  
 字  
 欠  
 色  
 尾  
 字  
 字  
 色

報苞

生貝の耳と傷く牡丹子  
 肩とととととととととと  
 墨指は素と  
 片手付とととととととととと  
 力の物と  
 小便と  
 山

欠  
 主  
 柳  
 超  
 志  
 山

鷹橋の道の山伏並居の路  
 祖父の了常兼の名のを  
 干河舟推ものちね徳のもめ  
 化粧のる北けと院さふ  
 本字のこ百名もは見き  
 珠教のも街り幣のも街  
 玄洞のも街り幣のも街  
 杖持とあけても花の紋付  
 尻尾のも業と半の芝莖  
 涅槃も望の月や心潜戸  
 山 松 巴 佐 山 松 巴 佐

抵打のも雨とさきせま作の  
 念まのも身と吉原のも街  
 夜桃の指ふりじく力たき  
 在句のも根の赤石結のも  
 高のも土吾山へをたい布子の  
 大作のもれと呪のも利  
 鼻先のもて解刺の岸  
 梵偏とりつ子誓法の下結  
 捕まのもてもたり斬の楠  
 去つく物屋の強合もぬけ  
 山 松 巴 佐 山 松 巴 佐

喉欠く伽羅とくじ、青椒と巴  
 可紀よりつる舞一の弱  
 高くと積地投也舞る月  
 足へ物瓶の香手紙の足  
 高山とくく異種の人  
 巧く舟くく巧くく入  
 勾当と先へくく糖的素  
 こけぬ板の助とく 堂  
 生解の菊ととくく崖の屯  
 配符集、里、菊の集  
 口 松 巴 欧 伴 山 松 路 口 巴

珠翠

心流てもけ怖らや蕎麦の屯  
 夕への月若枕箱壺  
 秋の若好織と統は一つ糸と  
 流ねくいハ判くく  
 松の根や五十三泥名ぬ  
 多不、くくく船も出くく  
 欠 徒 毛 茶 音 松 磷 巴 起 巴 喜 松

承慶の研と可ねなる如物枝  
 秋え美の江中へ春  
 劫當の襪外へ能牡丹  
 皆口おとせりと茶酒  
 糸針のこも目つきと入様山  
 裡の輪荷の襪新出さるる  
 その敷中銀の腮より二月  
 かくせし瓦と物帳も 蹴  
 施けけり露の雨に色うつり  
 毎是又橋の里へくおても

之茶 白作 礪色 礪色 礪色 礪色 礪色 礪色  
 礪色 礪色 礪色 礪色 礪色 礪色 礪色 礪色

明日の蚤く解けむも毒  
 解りぬるは赤くも色い  
 三河の事と云ふは奥也  
 昔の素直の首に満足  
 奇生の毛は心細の下  
 吟吟二口豆膚ても臨  
 禪と偶々もと海へ書  
 時方とてし 面洗ひる  
 髻と射るの似るはく書  
 戒と破れはなも池へ池

礪色 礪色 礪色 礪色 礪色 礪色 礪色 礪色  
 礪色 礪色 礪色 礪色 礪色 礪色 礪色 礪色

百里餘、目子と幸きを納  
嶺、つと起し、流人かひ  
登去へ強き、あも世と長也は  
あもしい、あう曲代の号昇  
系清、幸た遠く、屬遠る  
且、竹、許は、離活の至後  
幸か、帳、睡とあても、始、的  
網と、初ら、向、去、く、の、素、新  
白、魚、の、骨、に、漬、て、あ、む、の、飯  
人も、始、と、ま、真、の、海、面  
嶺、と

系舟

此、舟、の、系、す  
あ、ら、う

甲、舟、の、安、居、車、や、橋、の、雲、  
も、ぐ、ら、と、や、ん、松、の、暖、心、  
あ、つ、ま、り、あ、り、船、も、来、り、代、舟、  
あ、つ、ま、り、一、夜、利、力、や、ん、偏、徒、  
飯、の、月、頬、ま、り、蒼、の、跡、と、舟、  
豆、腐、も、網、に、あ、ら、う、か、せ、り、非、山



新儀ありしむさろの川宿  
 いししちりしたちりと振  
 十月乃我の本持り志いの灯  
 枕よりありしむさろの川  
 横のふさか河にもうさだ  
 一し位よりんか一海さ  
 ちあおもあると言ひの風  
 各とくしし烟の里波  
 流れし、機もさ南の石の  
 七更の唯りししき

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

家まほりもろむの  
 世、卯田刻の子能り  
 多和、継るあき、肩  
 元山、ちりしなす  
 鏡神の耳より水のしれり  
 のうくくるやん海料理場  
 重信とつゝ、海、鬼紫回  
 笠居、ちりしなすの系  
 利とそ、又らり髪の前  
 味、後の信よな木の鏡、

山 山 山 山 山 山 山 山 山 山 山 山

遊歌の舟も流るるは  
 一重櫓と船も福庭  
 いちこは隈とまの櫓の  
 夏のあつしは出流り  
 やまの梅子舟の園生の  
 流るるはさけし知ら  
 乃あつとさあえん  
 下流とらふ細き  
 舟の書が車や舟の  
 まくらとわらん櫓の  
 山

三果

越後  
 井口半六衛  
 小出村



越後國 其美郡

子方 母也

井上守之



海國圖志